

和紙の使用方法—障子、書簡、文化遺産の保存と補修など

美濃和紙は、長い間、その耐久性と不純物のなさから重宝されてきました。上質な天然素材と靱皮繊維をしっかりと絡ませる技法により、美濃の和紙は何世代にもわたりその丈夫さと美しさを保ち続けています。現存する日本最古の紙は美濃のもので、紀元 702 年の家系図に用いられたものでした。8 世紀になると日本では仏教が広まり、美濃和紙は、経典の写経や政府記録に用いられるようになりました。

江戸時代（1603～1867 年）、美濃和紙は、徳川将軍が法貨に使用し、また、障子や岐阜提灯など、役人向けの質の高いアイテムにも用いられました。江戸時代、美濃和紙の需要は大幅に高まり、美濃の紙商人は栄えました。

美濃和紙は今でも提灯や障子に使用されており、海外では新たな市場も見出しています。2005 年、京都迎賓館では 5,000 枚の本美濃紙を発注し、障子や照明具にこれを使用しています。本美濃紙は、美術品や書籍、資料の保全用に、世界中の博物館で販売されています。本美濃紙は軽くて丈夫なうえ、時間が経っても黄ばまず、しかも酸性でないことから、保全や補修の対象となる遺物を傷つけることはありません。

また、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技会では、選手に贈られる賞状用紙にも美濃和紙が使用されました。競技会用に発注された 17,600 枚の和紙を作るのに、美濃の和紙職人たちは実に 1 年近くを要しました。